



警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年4月発行（第48号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「苦い水」 エレミヤ

◎証「霊の戦い」 E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「苦い水」 by エレミヤ

本日は苦い水として、このことを見ていきましょう。

< 苦い水で人が死ぬ >

聖書は終末の日に水が苦くなり、人が死ぬことを語ります。以下の通りです。

“黙示録8:11 この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。”

ここに水が苦くなり、多くの人が死ぬことが描かれています。この箇所をどう理解すべきなのでしょう？ どう、解釈すべきなのでしょう？ ある人々は苦よもぎは（原発事故のあった）チェルノブイリのことだ、だから、これは、原発の放射能の害を語るといいます。そのような解釈ももしかすると多少は正しいかもしれませんが。しかし、聖書は基本的にクリスチャンにあてて書かれたもの、であることを思い出しましょう。マタイや、マルコの福音書が信仰や永遠の命と関係あるように、黙示録も同じく、信仰や、永遠の命と関係があることが描かれているのです。さらにまた、聖書は以下のみことばのように、たとえや謎の書であることを思い出

しましょう。

“詩篇49:4 私はたとえに耳を傾け、立琴に合わせて私のなぞを解き明かそう。”

ここでは、「私のなぞを解き明かそう」として、神ご自身が聖書の中に多くのなぞが含まれていることを語っています。そうです、聖書は単純な書ではなく、逆に神の知恵により、書かれたものであり、「なぞ」に満ちている書なのです。そしてその中でも特に黙示録はたとえや、なぞに満ちた書なので、そのなぞを主の知恵により、解き明かしてもらうことが大事なのです。苦いからそれは、放射能を指すだなどとのあてずっぽうみたいな、表面的な解釈ばかりに終始すべきではありません。

< 苦い水に関するなぞとは何か？ >

それでは、この苦い水に関するなぞとは何なのでしょう？ 一つのヒントとして、苦い水に関する記述が旧約の民数記にあります。この箇所を見てみましょう。

“民数記5:19 祭司は女に誓わせ、これに言う。『もしも、他の男があなたと寝たことがなく、またあなたが夫のもとにありながら道ならぬことをして汚れたことがなければ、あなたはこののろいをもたらす苦い水

の害を受けないように。

5:24 こののろいをもたらす苦い水をその女に飲ませると、のろいをもたらす水が彼女の中にはいつて苦くなるであろう。”

ここでは、夫から姦通の疑いを持たれた女（妻）に関連して「苦い水」を飲むことが描かれています。そして、その女が実際に姦通を行っていないければ、その水を飲んでも水は苦くならず、苦い水の害を受けない、しかし、姦淫を行っているなら、彼女が苦い水の害を受けることが描かれているのです。女や妻のことにもたとえがあると思われま。エペソ書には、結婚は奥義であり、キリストと教会をさす、とも書かれていますので、女は、教会をさすたとえであると思えます。少し複雑ですが、これらのことがらをあわせて考えるなら、黙示録の日に水が苦くなり、多くの人が害を受けるとは女、すなわち、終末の日の教会の問題と関係があることが想像できます。

具体的には、本来唯一の夫であるキリストに貞潔を守るはずの教会がその日、他の者との姦淫を行う、それゆえ水が苦くなり、その苦い水のゆえ、害を受ける人が起きてくる、そのようなことが語られているように、思えるのです。

実際、今の教会は真の夫であるキリストを離れ、他のものを夫としつつあるように思えます。たとえば、カソリックでは、真の夫であるキリストのことば、聖書のことばをないがしろにし、法王のことばや、マリヤへの礼拝を優先しています。何の像をも拝んではいけない、との聖書のことば、キリストのことばを投げ捨て、マリヤの像を拝み、崇敬などの屁理屈をこねてこのような偶像崇拝を正当化しているのです。

そうです、この教会は、まさに真の夫であるキリストを捨て、他のものと姦淫を行っているのです。そして、それゆえ、この教会の水、霊は苦くなり、多くの人がその害を受けるようになっているのです。カソリック教会を悩ます神父による多くのスキャンダルはこの苦い水、カソリックをおおう悪霊のゆえなのです。

終末の日の教会が、この世やら、他の存在を受け入れ、真の夫であるキリストを離れていく、

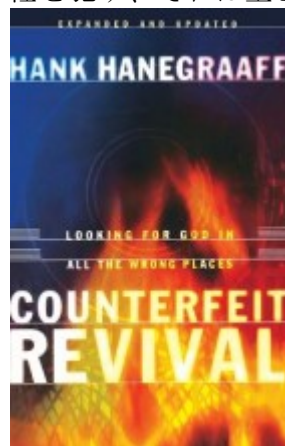
それはあつてはならないことですが、しかし、どうも聖書の多くの記述はこのことが実現することを暗示しているように思えます。たとえば、テサロニケ書は、終末の日の教会が背教することを述べます。以下の通りです。

“2テサ2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。”

ここで使われている「背教」ということばにはギリシャ語のapostasiaということばが使われています。このことばは、以下の「離別」と訳されたことば、apostasionと同じ意味合いなのです。ギリシャ語辞書にそのように、説明されていました。

“マタイ5:31 また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』とされています。”

背教とは、結婚相手を追い出すことと同じような意味合いのことばなのです。すなわち、終末の日に起きる背教とはどういうことかという、教会がキリストとの婚姻関係を解消し、キリストの霊である聖霊を離別し、追い出す、という意味合いがあるのです。そして、それは、言い方を変えるなら、妻である教会の不貞であり、そして、それゆえ、その呪いとして、苦い水が教会に下される、そう理解できるのです。教会が終末の日に夫であるキリストを離れ、姦淫を犯す、それは望ましくないことなのですが、



苦い水、悪霊的なりバイバルを告発する本

どうも黙示録はそのことが起きることを暗示しているように思います。たとえば、以下の淫婦バビロンの特徴は、教会の特徴と似ています。

“黙示録 14:8 また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」”

ぶどう酒は聖餐式のぶどう酒に通じます。ですから、このバビロンという淫婦は確かに教会と関係がある様に思えるのです。

また、7つ目の教会、終末の教会であるラオデキヤでは、主が家の外に追い出されています。以下の通りです。

“黙示録 3:20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。”

夫婦は同じ家に住むものであり、片方が家を追い出されるとは結婚関係の異常事態なのですが、それが、この終末の教会では起きているのです。夫であるキリストは妻である教会から外へ追い出されているのです。

このようにいくつかのみことばは、終末の日に妻である教会が夫である、キリストから、離れていく、背いていくことを暗示し、もしくは、明示するのです。そのようなわけで、黙示録8章の水が苦くなる、その理由は終末の日の教会の姦淫と関係がある、その姦淫のゆえ、神からの災いとして、女、教会に苦い水の害が下されていく、そう理解できるのです。

< 苦い水とは何か？ >

さて、具体的に苦い水とは何をさすのでしょうか？そして、その苦い水による害とは具体的にはどのようなことなのでしょう？それを考えてみたいと思います。

水は聖霊のたとえと理解できます。主がこう

いわれたからです。

“ヨハネ7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。”

7:39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。”

水は聖霊のたとえなのです。そして、その水が苦くなるとは具体的には、教会に働いていた聖霊が変質し、その代わりに悪霊が働くようになる、そう理解できるのです。教会で、聖霊の働きが悪霊に変わる？そんなことが起こるはずはない、との考えもあるかもしれませんが、どうも聖書はそのようなことが終末の日に起きることを預言し、前もって警告しているように思います。以下のヤコブ書にも、苦い水に関する記述があります。

“ヤコブ3:11 泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。”

このヤコブ書3章は、教師に関する警告の箇所です。そして、ここでは、同じ教師を通してあるときは甘い水、すなわち、聖霊の働きがある、しかし、場合によっては、同じ教師を通して苦い水、悪い霊の注ぎを受けてしまう、そのようなことがあってはならない、そう警告しているのです。

このようなことがあってはいけないのですが、しかし、現実には起こりえます。教師はその歩み方しだいで、その奉仕により、聖霊ならぬ、悪霊を人々に下すこともありえるのです。そして、この苦い水は、黙示録8章の苦い水に通じます。ですから、黙示録の苦い水とは、姦淫の教会に対して、教師、牧師を通して、苦い水、具体的には、悪い霊が注がれるようになる、その結果、多くの人が霊的に死んでいく、そのような日を預言していると理解できるのです。

< 人を生かすものは霊である >

あらためていうようですが、私たちクリスチャンにとり、もっとも大事な部分、根幹は霊的

なことがらであり、どのような霊を受けているかどうかが大いに影響を及ぼすことを知りました。主ご自身がこういわれました。

“ヨハネ6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。”

主は、その人が受ける霊こそが人に影響を与え、いのちを与える、もっとも根幹的な部分であり、ポイントであることを述べたのです。ですので、終わりの日に水が苦い水になる、聖霊が悪霊に変わるとはクリスチャンの歩みに関してもっとも大事な部分に変質するとの恐るべき日を前もって語っているのです。その日、背教の教会に対して神の許しの中で、大きな災いが起き、クリスチャンのもっとも大事な、永遠の命に関わる部分、受ける霊に関して、敵の攻撃が加えられる、そう語られていることを知みましょう。

もう少し聖霊に関して考えて見ましょう。霊は血にもたとえられます。以下のレビ記では、その血である聖霊こそが人の命に関わる大事な存在であることを述べます。

“レビ17:14 すべての肉のいのちは、その血が、そのいのちそのものである。それゆえ、わたしはイスラエル人に言っている。『あなたがたは、どんな肉の血も食べてはならない。すべての肉のいのちは、その血そのものであるからだ。それを食べる者はだれでも断ち切れなければならない。』”

ここでは血が命そのものであることが描かれています。たとえの意味合いとしては、血は聖霊をあらわします。ですから、ここでは、その人の命は、その人の持っている血、すなわち、霊に関わっているということが語られているのです。もっとはっきりいうなら、その人が正しい血を受けているかどうか、その人の命の根幹に関わる、どのような霊を受けるかどうか、命の根本問題である、そのことが語られているのです。

もし私たちが、神からの純粋な聖い聖霊を受けるなら、聖い歩みに導かれ、神の命に満ちる

でしょう。しかし、神ならぬ悪霊を受けるなら、その人はその歩みが汚れた惑わされたものなり、永遠の命から遠ざけられてしまうのです。まことに血、すなわち、霊こそがその人の根本的な部分に影響を与えるのです。

<山が海に投げ込まれる日>

これらの視点に沿って冒頭の黙示録8章8～11の記述を考えて見ましょう。

“
黙示録8:8 第二の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。”

山は木の生えるところ、として教会のたとえと理解できます。クリスチャンはオリーブ、いちじくなどの木にたとえられますが、その木が生える山は教会をたとえているのです。そして、火とはペンテコステの日、聖霊が炎の様な形で下ったとの記述からわかるように、霊的なことに関わるたとえです。ここでは、悪い霊のたとえと理解できます。海も血も同じく霊のたとえ、悪い霊のたとえと理解できます。すなわち、ここで語られていることは、教会が悪霊の海に投げ込まれる、悪霊のリバイバルに席卷されるようになる、そのような未来が語られているのです。

“8:9 すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。”

いのちのあるものとは、永遠の命を持つクリスチャンのことをさすたとえと理解できます。「人間を捕る漁師」とのことばがあるように、クリスチャンは魚の様に海、聖霊の海で生きるものなのです。そのような命を持つクリスチャンも悪霊を受け続けているうちに死に渡され、キリストの命を失っていくようになる、そう語られていると理解できます。船は、海、聖霊の海を動くものとして教会のたとえです。

ですから、ここでは悪霊のリバイバルの中で、

船、教会がこわされていくことがたとえで語られています。

“ 8:10 第三の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。”

信仰の先祖アブラハムのその子孫は、「天の星、地の砂」にたとえられました。だから、天の星はアブラハムの子孫である、クリスチャンをさすたとえと理解できます。そして、ここでは、悪霊のリバイバルの火に燃えたある大きなクリスチャン、器がキリスト教会の水源に落ち、多くの人に悪霊の水を注ぐ様になることが描かれているのです。

“ 8:11 この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。”

この星、苦よもぎと呼ばれる器はもしかすると反キリストかもしれません。そしてここでは、彼の注ぐ霊を受け、多くのクリスチャンが苦い水、悪い霊を受け、命を失い、死や罪に渡されることが描かれています。

ですから、繰り返すようですが、ここでは、クリスチャンのもっとも大事な部分、聖霊に関して、攻撃が起きる日が語られているのです。先ほど書いたように、人を生かしたり、影響を与えるのは霊なのです。その霊が悪霊、サタン来の霊であったら、誰がまともなクリスチャン生活を送ることができるでしょう。逆にそのことばや、行いはおかしなものとなり、罪に陥り、いずれは永遠の命を失うようになるのです。

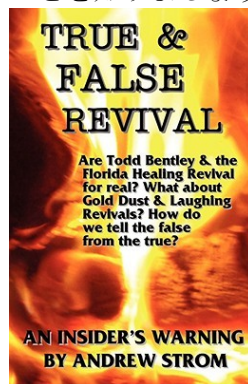
<すでに教会に流れ込んでいる苦い水>

このこと、苦い水が与えられるとのことは、遠い将来のことではなく、今まさに実現しつつある現実です。具体的にはピーター・ワグナーが提唱する聖霊の第3の波とは、悪霊の波であり、苦い水なのです。それは、かつて異端としてペンテコステ派により、拒否された後の雨運動の再来です。そして、この流れを受け入れて

いる教会には苦い水が流れ、多くのスキャンダルや問題が起きるようになっていきます。「木はその実によって知られる」とありますが、それらの問題やスキャンダルは実であり、その牧師や働き人がどのような木であるかを表します。また、どのような霊に動かされているかをあらわします。その人の霊がその人の行いに影響を及ぼすのです。

本来キリストの教会は、世の光であるべきであり、正しい道をさし示す灯台の様な存在であるべきなのです。しかし、悲しいかな、今、キリスト教会におかしなスキャンダルが多く起きています。何故そのようなことが起きるのか？その理由は、この教会を流れている水が苦い水だから、と理解できます。

健康的なことを考えても、私たちがどのような水を飲むかは、私たちの体の状態に影響します。冷たい、清潔な水を飲むなら、元気がでるでしょう。しかし、不潔なばい菌だらけの水を飲むならお腹を下します。水は我々の体の状態に影響を与えるのです。そして、それは、霊の水に関しても同じなのです。今の教会に問題が起きて来るのは、その流れている水、霊の問題なのです。聖書は、苦い水が下されることを語ります。そして、苦い水により、多くのものが死ぬことを語ります。死ぬとは文字通り肉体の死をさすかもしれませんし、たとえとしては、罪の結果として、魂の死を経験し、永遠の命を失うことを語るとも理解できます。聖書に「欲がはらんで、罪を生み、罪が熟して死に至る」ヤコブ1：15と書かれているからです。このことを知しましょう。—以上—



偽りのリバイバルを告発する本

先日礼拝のメッセージを通して、天の御国を目指すにあたって、とても大事なポイントについて教えていただきましたので話をしたいと思います。

そのことに関して、第二テモテへの手紙2章のみことばを見たいと思います。

2:5 また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。(第二テモテへの手紙2章5節)

上記聖句はパウロが霊の子どもテモテに対して語ったことばです。今さら取り立てて言うのもなんですが、パウロやテモテ、そして私たちクリスチャンは「天の御国」に入るように召されています。その際に注意書きとして言われたのがこのことばです。ここで「**競技**」と「**規定**」ということばが使われています。そして大事なのは、「**規定**」に従って「**競技**」をすることについて言われています。その時にエレミヤ牧師が一例として「**霊の戦い**」について話をされました。今回のメインはそのことなので、その時に引用したみことばに基づいて話したいと思います。

参照 II ペテロの手紙2:10,11

2:10 汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、栄誉ある人たちをそしって、恐れるところがありません。

2:11 それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません。

先ほど、「**規定**」に従って私たちは天の御国に入るために、「**競技**」(原語:格闘技→悪霊との格闘)をしなければならないことを話しましたが、私たちは目には見えない敵(サタン)との戦いがある、その存在にその都度主にあつて勝利を得ていかなければいけません。ではあつても、それに関してルールを知らなければいけません。そう、天の御国で栄冠を受けるために神さまが定めたルールや規定があるのです。そして霊的な事柄に関しても神さまが語っているので、そのことを見ていきたいと思えます。

さて、第二ペテロの手紙で、「**権威を侮る者**」と書かれています。そして11節で、「**御使い**」というこ

とばが出てきます。

そのことに関して以下、エレミヤ牧師が礼拝でメッセージされていたこととお読みください。

今の世界において、人間(弟)は御使い

(兄)の権威の下にあるのでこのことを守っていくことに御心があります。神の与えた権威は尊重していくことにポイントがあります。それに関して勘違いしている人がいます。キリスト教会の働き人、ピーター・ワグナーは「**霊の戦い**」を奨励していますが、御使いをやっつけに行くのはみことばに書かれていることとは違います。御使いのほうが、人間よりも勢いに優っています。なので**霊の戦い**に行くのは危険です。霊の戦いに行くというのは、交番のお巡りさんに石を投げるようなものです。霊の戦いで権威に逆らつて危険な目に会つたり、中には命を失つた人までいます。御使いの権威は存在しているので大変な目に会います。御使いに対しての対応や霊についてのルールがあります。こういうことを知っていようといまいと、みことばによって裁かれてしまうので気をつけていきましょう。たとえ悪い御使いであっても権威に対抗するのはNGです。

また、エレミヤ牧師がレムナントキリスト教会の牧師に召される前に、かつて行っていた教会の人たちと一緒に某神宮に**霊の戦い**に行ったことがあつて、その日は特になんともなかったようですが、翌日急に激しい頭痛に襲われたそうです。幸いその後良くなったそうですが・・・原因は「**霊の戦い**」だったそうです。神の定めた権威に逆らつて、戒めを受けたのかもしれませんが。じつは私もかつてあるキリスト教会から、「教会の近くに神社があるからさあ、今度皆で悪霊の追い出しに行つてみない? そうしたらそこで拝んでいた人たちが悔い改めてクリスチャンになるかもよ」というお誘いを受けたことがありました。

良い提案だと思いましたが、しかしその後、話が出ることはなく、行くことはありませんでした。今にして思えば、「ああ、セーフだった！行っていたら大変なことになっていたかも知れない」と、エレミヤ牧師のメッセージや証を聞いてホッと胸をなでおろしました。

たしかに聖書の中で、「悪霊の追い出し」について語られています。また、イエスさま御自身が、悪霊を追い出すことのできなかった弟子たちを叱責されている場面もあります。でも、そのことに関して、すべて当たっているかどうかは分かりませんが、礼拝のメッセージやエレミヤ牧師の証を通して、悪霊を追い出すことについて神さまはこんな風に語っているかなあと思うことがありましたので簡単に述べたいと思います。福音書のみことばにそのヒントがありますので、参考までに見てみましょう。

参照 マタイの福音書8:16

8:16 夕方になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れて来た。そこで、イエスはみことばをもって霊どもを追い出し、また病気の人々をみなお直しになった。

上記の聖句から、主イエスは「悪霊」につかれて病気になった人々から「悪霊」を追い出して、癒されたことがわかります。主がわざわざどこかの寺院に出かけて、そこにいる悪霊の追い出しをしたとか、戦ったとか、そういった記述は聖書のどこを探しても見当たりません。「悪霊」の追い出しに関して・・・聖書には主イエスは病気やわずらいから人々を解放するために、悪霊を追い出したということが書かれているだけです。私たちが、主がなさったことに準じるのなら・・・霊的にあるいは肉体において病んでいる人が癒されるようにとりなしをしたり、そして場合によっては病んでいる人にとりついて悪しき霊を追い出すお祈りをするのが大事なのでは？と思います。

そう、そして病気の解放のためとはいえ、「悪しき霊」を追い出すことに関してもやはり聖書においてはルールがあるようですので、このことも見ておきたいと思います。大分前に使徒の働きのみことばを通して語ったことですが、「悪しき霊」を追い出すことができるのは、ペテロやヨハネやヤコブやパウ

ロのように、イエスさまの弟子として歩んでいる人たちです。それ以外の人が悪霊を追い出す権威を行使するのはかなり危険なのでは？と思います。絶対にそうだ！とは申しませんが、下記みことばはそのことを語っていると思います。

参照 使徒の働き19:11-16

19:11 神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行なわれた。

19:12 パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った。

19:13 ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈禱師の中のある者たちも、ためしに、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をとえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる。」と言ってみた。

19:14 そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。

19:15 すると悪霊が答えて、「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ。」と言った。

19:16 そして悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押えつけて、みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した。

13節に書かれているように、祭司長スケワの息子たちはイエスの名によって悪しき霊を追い出そうとしました。しかしあろうことか、悪霊から「何者だ！」と言われ、打ち負かされてしまいました。スケワの息子たちはイエスの名を使っていましたが、しかし、イエスの弟子ではありませんでした。いわば群衆の歩みをしているクリスチャンの様なものです。反対に11,12節に書かれているように、神はパウロの手によって奇蹟を成されました。パウロを通して病んでいる人から悪霊が出て行き、神の癒しのみわざがあらわされました。また、主イエスは12弟子に悪しき霊を追い出す権威をお与えになりました。群衆に権威を与えたとは、どこにも書かれていません。このことから悪しき霊を追い出すことができるのは、12使徒やパウロのように主の弟子として歩んでいるクリスチャンだということが理解できるのではないのでしょうか？今の時代もそのことに準じると思います。真にイエス・キリストの弟子として歩みをし

ているクリスチャンに悪しき霊を追い出す権威は与えられるのだと思います。なので弟子の歩みをしていない人が悪しき霊を追い出す権威を行使するのは、非常に危険なので気をつけたほうが良いと思います。

以上、「霊の戦い」に関してどのように理解するか？についても天の御国を目指すための1つの大

事なポイントになるのでは？と思いましたが証をさせていただきました。聖書が語っているこういうポイントに注意しながらも、ぜひ永遠の命の一事にひたすら励んでいきたいと思っています。今回も大事なポイントについて語ってくださった神さまに栄光と誉れがありますように。一以上一

<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の闇に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。H25年12月1日発売。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com